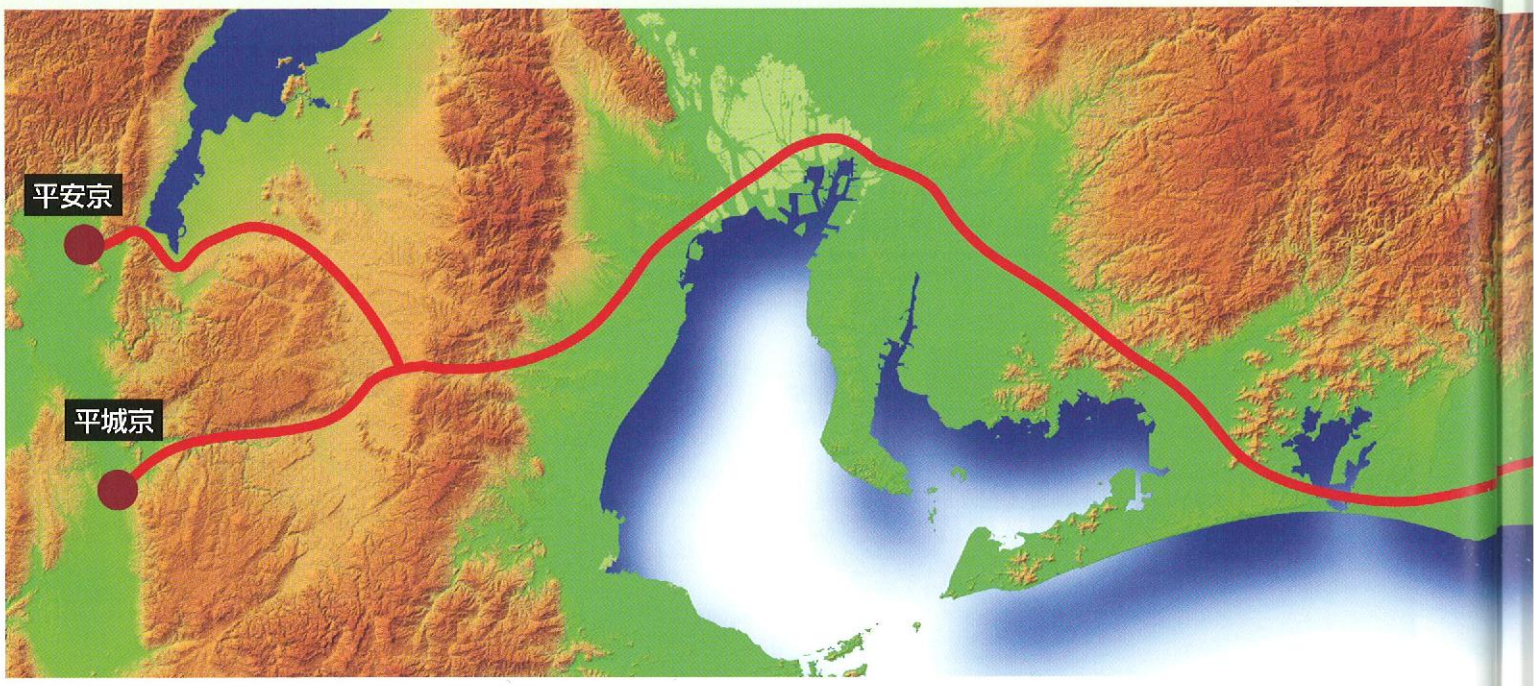
7 奈良・京の都と掛川

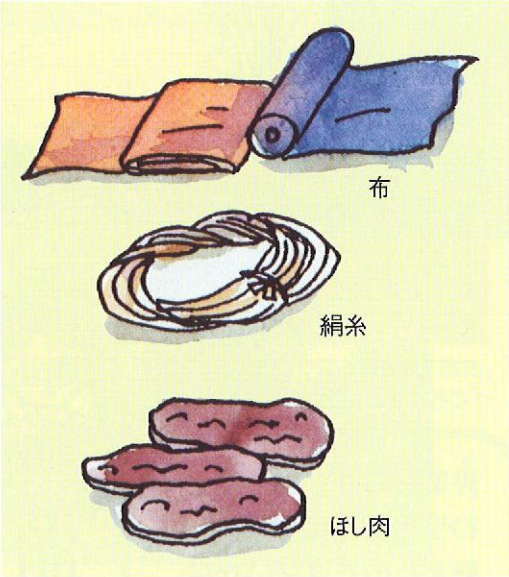
◆掛川から納められていた租・庸・調



国土地理院数値地図50mメッシュ／日本-II（京都府～静岡県周辺）

◆京の都へ納めていたもの

租は、稲を納めるもので、これは遠江国、郡の倉庫にたくわえられました。庸と調が、都まで運ばれました。庸は、布を納めるもので、調は絹や糸などの繊維製品のほかに、地方の特産物が納められました。

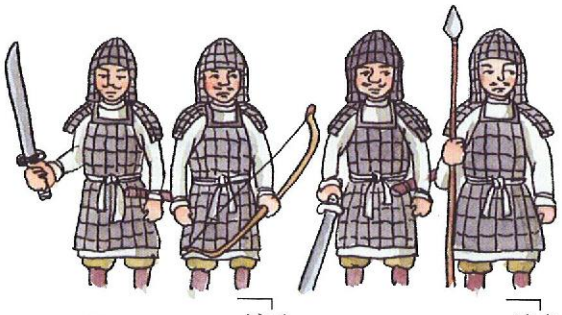


◆「兵士一人を出せば、その戸は滅ぶ」

物で納める税のほかに、衛士と呼ばれる都の警備、防人（さきもり）と呼ばれる九州の警備につく兵役がありました。防人は、働きざかりの男子が3年も家を留守にすることから、「兵士一人を出せば、その戸は滅ぶ」と言われるほど、負担が重くのしかかりました。『万葉集』には、防人として掛川から九州に派遣された人が詠んだ歌も収められています。

『万葉集』、丈部黒当の碑（掛川西高校内）

都に税を運ぶ人たち（想像図）



「父母も花にもがもや草枕
旅は行くとも捧ごて行かむ」
遠江国佐野郡　丈部黒当
（父母が花でもあったらいいなあ、
旅に行かなければならないが捧げてもって行こう）

「父母が殿の後のももよ草
百代いでませ我が来たるまで」
遠江国佐野郡　生玉部足国
（父母のお住まいの裏庭のももよ草のように、
いつまでもお達者でいてくだされ、おれが帰ってくる日まで）

※遠江国佐野郡＝掛川市

遠江（掛川）から平安京まで庸・調などの税を何日かけて運んだのかな。

庸や調など政府に納める税は、それらの税を負担する家が都まで運ぶ決まりになっていました。遠江国から納められる税は、11月の末までに都に納めなければならず、所要日数も遠江から平安京（京都）まで15日、平安京から遠江までの帰りが８日というように決められていました。この往復の間の食料は、運ぶ人が負担することになっていました。

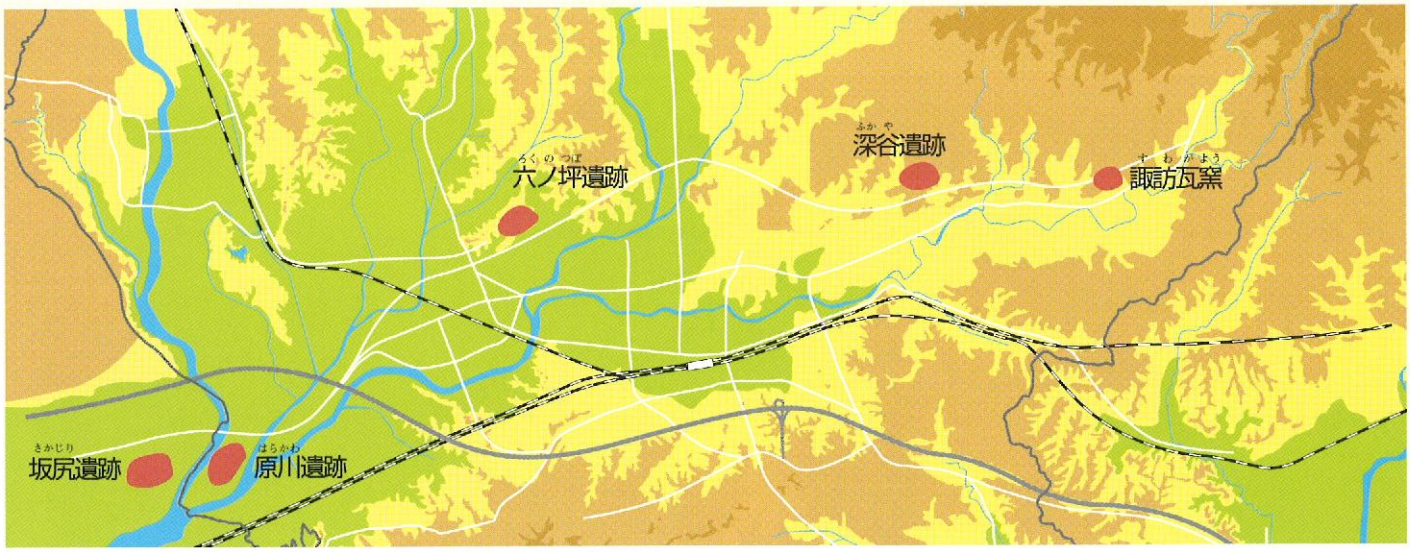
寒い冬に重たい荷物を都まで運び、また帰ってくるという負担に耐えきれずに逃げ出す人や、食料がなくなって餓死する人もいたようです。

1日どのくらい歩いたのかな。ちょっと計算してみよう。

旧東海道京都三条大橋～掛川駅間を240kmとします。

上り、行き240km÷15日＝16km　1日平均16km
下り、帰り240km÷8日＝30km　1日平均30km

8 奈良・平安時代の掛川

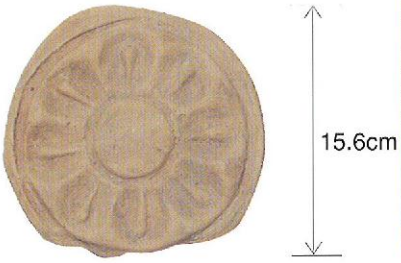


◆高度な技術がわかる飛鳥時代から奈良時代の窯跡―諏訪瓦窯(伊達方)

さかがわ幼稚園の裏山の窯跡（昭和27年）

窯は、南向きの山の斜面に２つ並んでつくられていて、中から瓦が発見されました。

このころの人々は、茅などでつくられた屋根の竪穴住居に住んでいて、屋根に瓦を使う建物は、国分寺などの寺や国の役所などに限られていました。



発見された瓦

掛川で作った瓦はどんなところで使われたのだろう。

奈良時代、お寺は掛川にもあったのかな。

◆奈良へ運ばれた、長福寺(本郷)の鐘

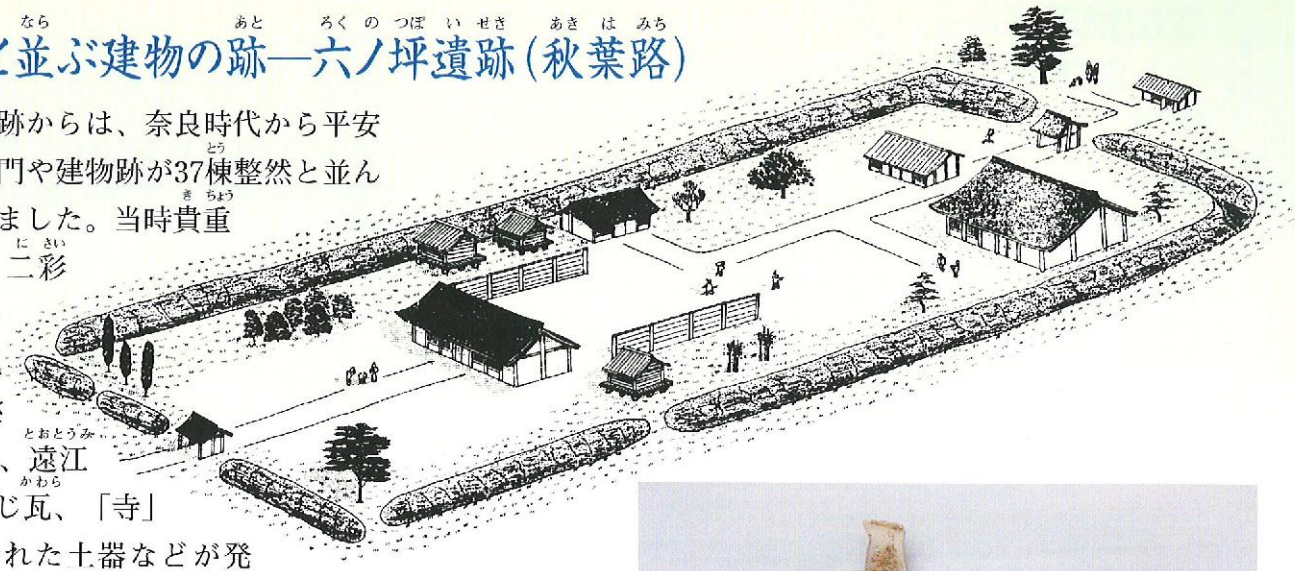
長福寺は、聖武天皇のころに建てられたといわれています。

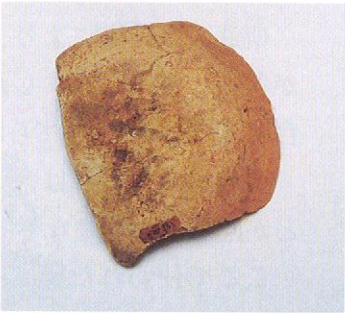
掛川から遠く離れた奈良の大峰山に、「天慶７年（944年）６月２日遠江国佐野郡原田郷長福寺鐘」と刻まれた大きな釣り鐘があり、国の重要文化財に指定されています。だれが、掛川から奈良まで大きな釣り鐘を運んだのでしょう。そのむかし、山伏が鐘を持ちあげて空を飛んでいったという説と、14世紀の南北朝の戦いの時に、北畠軍が運んでいったという説があります。

大峰山（奈良県）にある
長福寺の釣り鐘

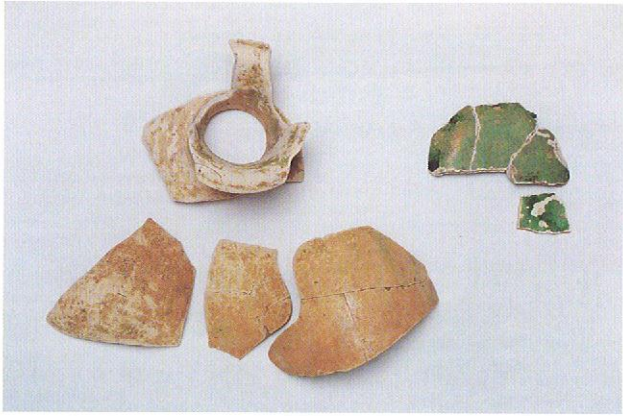
◆整然と並ぶ建物の跡―六ノ坪遺跡（秋葉路）

六ノ坪遺跡からは、奈良時代から平安時代までの門や建物跡が37棟整然と並んで発見されました。当時貴重であった、二彩と呼ばれる緑色と黄色で色付けされた土器や、遠江国分寺と同じ瓦、「寺」と墨で書かれた土器などが発見されています。国、郡に関係する役所か寺と考えられます。





寺と書かれた土器



二彩壺と三彩坏

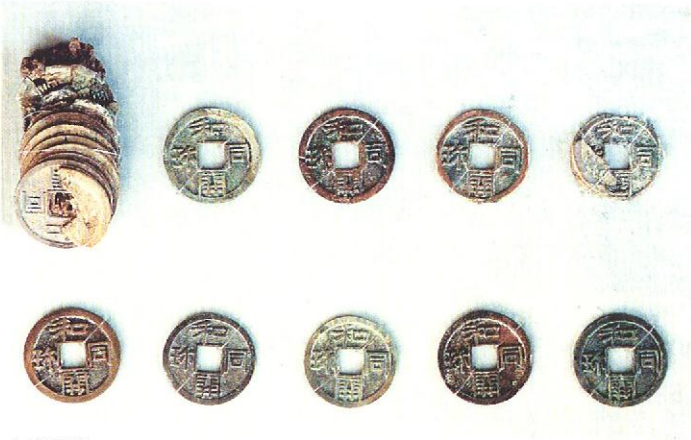
◆和同開珎が出土した深谷遺跡（淡陽）

深谷遺跡からは、708年につくられて、奈良時代に流通した和同開珎19枚が、白銅鏡２枚といっしょに発見されました。

奈良の都では、商人や職人など食料を生産しない人々もいたので、米や野菜などを売る市がつくられ、和同開珎が流通していたと考えられます。しかし、当時の掛川では、貨幣はほとんど使われず、物物交換が主であったと考えられます。

鏡２枚は、遣唐使が中国から持ち帰った鏡をもとに日本でつくられたものです。

この和同開珎と鏡は、奈良の都に行った人が持ち帰ったと考えられます。



和同開珎

白銅鏡

白銅鏡

9 清ヶ谷古窯群を探る

◆遠江国分寺の瓦を焼いた窯跡

清ヶ谷古窯群には、古墳時代から平安時代にかけての窯跡が50基とも100基とも言われるほどたくさんあります。

瓦の他にも須恵器と呼ばれる堅い灰色の土器も焼かれていました。清ヶ谷の地名も須恵ヶ谷がなまってできたともいわれています。

清ヶ谷集落の入口付近の竜田神社には、平安時代に使われた瓦を焼いた竜天薬師堂古窯があります。

竜天薬師堂古窯（竜田神社）

聖武天皇の命により、国家の平安を祈るための国分寺が各国に建てられました。遠江（県西部）では、磐田原台地（磐田市）に建てられ、国の特別史跡になっています。

この遠江国分寺は、金堂や講堂、南大門、七重の塔などが建ち並ぶ大きな寺でした。

ここで使われた瓦は、清ヶ谷古窯群で焼かれ、約11㎞離れた磐田原台地まで運ばれました。

昔は、清ヶ谷や磐田原台地の南側が入江になっていて、船を使って運ばれたといわれています。

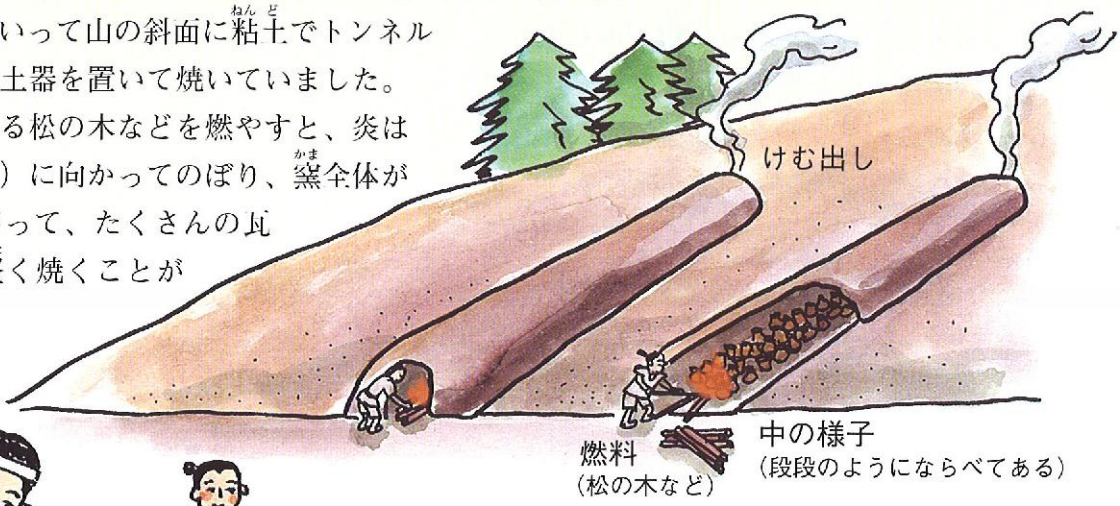
遠江国分寺復元模型

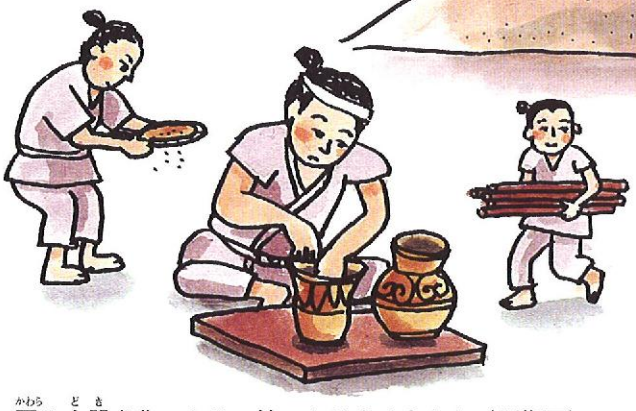
工夫して焼いていたんだね

◆そのころの瓦の焼き方

縄文時代から続く「野焼き」は、地面に穴を掘って土器を焼く方法です。

清ヶ谷では「穴窯」といって山の斜面に粘土でトンネルを作り、その内側に瓦や土器を置いて焼いていました。トンネルの下で燃料となる松の木などを燃やすと、炎はトンネルの上（けむ出し）に向かってのぼり、窯全体が高温になります。したがって、たくさんの瓦や土器などをむらなく堅く焼くことができます。





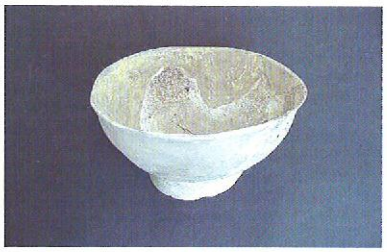
瓦や土器を作ったり、焼いたりする人たち（想像図）

清ヶ谷は、小笠山のふもとに位置しています。小笠山は土器を作るのに適した粘土がとれます。この粘土を使って、今でも陶器（笠山焼き、水ヶ谷焼き）が作られています。

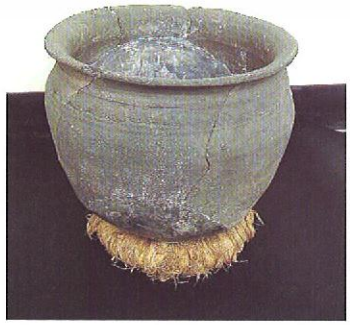
窯跡の一つ、白山2号窯跡（昭和54年）

平瓦の一部

軒先の瓦



わん



かめ

二面硯

調べてみよう